

教育委員会だより

令和6年11月28日号 多治見市教育委員会 教育総務課

くめざす子ども像
お互いを尊重し、
主体的に学び、
挑戦する多治見の子

訪問回数 73 回 ～英語教育コーディネーター～

今年度から、本市英語教育の充実を目的に『英語教育コーディネーター』を配置しました。小・中学校への訪問授業指導は11月末までで73回を数え、その中には、市内英語科教員46名中45名が含まれます。英語科教員を中心に授業を参観し、丁寧で熱心な個別指導を行っています。若手から中堅層のスキルアップはもちろん、教科書とデジタル指導書を効果的に活用した授業モデルの構築、日々の実践における困り感の共有など、学校現場の先生方を強力にサポートしています。ほかに、研究指定校発表会に向けた継続的な支援、長年特色ある英語教育に取り組んでいる笠原小・中学校への支援、ALTや小学校外国語教育主任に対する研修会のサポートなど本市英語教育全般に深く携わっています。岡田海保コーディネーター曰く「これまでコミュニケーション重視で進んできた英語教育は、読み領域（読解）の指導の充実が求められています。実用的な英語をバランスよく学ぶこと、とりわけ“他者意識”を重視した学びが大切です。」とのこと。新たな人の配置と先生方のご努力により、英語教育が充実していく予感です！

顔の見える関係 ～民生委員と教育長の語る会～

11月15日（金）に、『民生児童委員と教育長の語る会』が行われました。代表委員さんの提言により『学校と教育委員会の連携体制』と『主任児童委員に求めること』について協議しました。教育委員会からは、まず昨年度協議した不登校対策について、その後の取組と現状を報告しました。次に、各学校と教育委員会は密に連携を図っていること、教育委員会は各校長の主体的な学校運営を重視していることなどをお話ししました。委員の皆様からは、学校への期待や素朴な疑問についてご発言がありました。

1時間ほどの会でしたが、とても有意義な時間になりました。教育長の結びの挨拶「顔の見える関係を大切にしていきたいでしょう。」という言葉に、笑顔で頷く委員さんの姿がとても印象的でした。



秋晴れの空のもと ～永保寺・五峰庵特別公開～

文化の継承と発信を目的として、42日間にわたり岐阜県で開催された『清流の国ふ文化祭2024（国民文化祭）』が24日に閉幕しました。本市においても文化財保護センターが主管し、数々の関連イベントを行いました。諏訪町に伝わる『小木棒の手（県重要無形文化財）』の展示や体験・披露（10/26）、荒川豊蔵氏が開いた『水月窯』の窯焚き体験会（11/10）、そして今回紹介する永保寺境内（多治見市記念物・名勝）にある『五峰庵』の特別公開とお茶会。それぞれの催しには多くの人々が訪れ、多治見が誇る文化に触れていただきました。

五峰庵の公開は、学芸員の説明を交えながら10名ほどのグループで行われました。葺替え工事を終えたばかりの茅葺き屋根が、清々しい秋晴れの空に見事に映えていました。庵内で行われたお茶会。めったに公開されることのない空間には、貴重な掛物や花器、茶道具が用いられ、そこでいただくお茶の味は格別なものでした（恥ずかしながら私も参加しました）。

展示会場には、開祖・夢窓国師や開山・仏徳禅師の直筆とされる県重要文化財の書跡などが数多く掲げられ、訪れた人々はその一つ一つに目を凝らして鑑賞していました。

今回のイベントは、改めて広く多治見の文化を知っていただくことや大切に保護していくことの意義について考える機会となりました。



副教育長のひとりごと 「子どもの視力低下」

文部科学省による学校保健統計調査（2023年度）の結果が発表されました。裸眼視力が1.0未満の割合は、小学生で約38%、中学生で約61%、高校生では約68%。過去最多だった前年度より減少したものの、依然として深刻な状況が続くとの報道でした。若年層へのスマートフォン普及、タブレット端末の貸与もその要因であることは言うに及びません。ある眼科の学校医さんが、タブレット端末の導入時から視力への影響を危惧していらっしやったのを記憶しています。

以前、学校職員向けの通信に「授業中のよそ見も大事!？」と題して、画面を30cm以上目から離して見ることや30分に1回は遠くを眺めることの必要性を訴えました。現代・未来を生きる子どもにとっての“必須アイテム”は、その便利さの一方で、視力低下という大きな健康被害をもたらしています。どのように両立・共存させていくべきかをもっと真剣に考えるべき時が来ています。